

佛 教 音 楽

—生命いのちの流れとひびき—

渡 邊 顯 信

I はじめに

皆さんこんにちは。先ほど学長先生がご挨拶で「三帰依文」について大切なことをおっしゃって下さいました。「宗教や佛教は生きるための拠り所となるもので、その拠り所に対する意思表示の一つが、皆さんと一緒に唱和した三帰依文であります」と。少し説明を加えますと、「三」とは、「佛（佛様）」と「法（佛様の教え）」と「僧」のことですね。特に「僧」とは、「特定の僧侶」のことではなく、原語のパーリ語や

サンスクリット語で「Saṅgha (僧伽サンガ)」と言い、「佛法を拠り所として集まった集合体、グループ」のことで、「僧伽」の省略形なのです。「三帰依文」全体で、自分たちが生活していくための拠り所を確認し実践して行く姿勢を明らかに意志表明した基本姿勢の言葉であります。

今年(西暦二〇〇〇年、二〇世紀最後の年ですが、数日前の五月一日と三日に、一七歳の少年二人が、悲しい行動を起こしてしまいました。しかしあの事件は、一七歳の少年たちだけの責任ではなく、戦後、すなわち一九四五年以降の教育や社会制度の急激な改変にも、その原因の一端があるような気がいたします。

ちよつと話題がそれますが、今年(光華女子学園の創立六〇周年の記念すべき年だ)とお聞きしました。その六〇周年の年に皆さんが縁あつてこの学園に在籍され、人によつては、今まで知らなかった人たちと同じクラスや隣のクラスにいますね。そういう「大切な時」を共有して居られるのですね。

この「二〇〇〇年」は、四六億年という長い地球の歴史からみますと、非常に短い時間です。またこの地球に人類が誕生したのも、わずか三〇〇万年ほど前のことです。

佛 教 音 楽

その歴史の中で、「今、二〇〇〇年五月二四日午前一〇時五〇分」、皆さんがこの一つの場所に集まっている、「サンガ」し合っているのです。「すばらしい出遇い」ではないでしょうか。このような歴史の一時期・瞬間に、「私」という自分が生を受け、現に今「出遇っている事実」をどの様に受けとめたいのか。一七歳の少年たちであれ、一八歳から二一歳のあなた方であれ、歳を重ねた私たちであれ、どの様に生きて行くのが最善なのか。それは年齢を重ねただけでは決められません。「自覚」という本人の質の問題なのです。皆さんと私がこの場に集まっているという事実において、同じ仲間同志です。その仲間の若いあなた方に、若干歳をとった者が申し上げる話にちよつと耳を傾けていただければありがたいと思います。

一 生命いのちの実感 — 最近の世相から（現代の諸問題と佛教の役割） —

この表現は、まさしく私自身の実感であります。先ず初めに二〇世紀までの時間を振り返ってみましょう。

一八世紀から一九世紀にかけて、産業革命がありました。イギリスで始まった産業

革命でしたが、一七〇〇年代の中頃までは、職人マイスターの手工業に基づく時代で、専門職人の下に弟子が集まる徒弟制の生産活動、家内工業でしたね。それが産業革命で機械化が進み、一八・一九世紀という時代の中で近代資本主義経済が確立し、社会革命に直結していきました。機械文明飛躍の時代になりました。

その結果の二〇世紀に私たちが生きているわけです。しかし、現在の私たちは、果して安心して生活しているでしょうか。モノは溢れ、技術は進歩し、便利な社会になっていますが、残念ながら私たちの中の二人が、五月一日と三日にああいう殺人事件を犯してしまいました。何の怨恨もない方の尊い生命を奪ってしまった。この様な人間社会に私たちが関わっていることを思いますと、機械文明に流されてきた自分たちに、全く責任はないと言い切れるでしょうか。反省の必要はないのでしょうか。

この二〇世紀に、科学・技術が進歩し発展した結果、その技術文明によって作られた「モノ」が、人間社会を「幸せにしたもの」も沢山あります。例えば目まぐるしいものとして、抗生物質等の医薬品開発のおかげで、一部では病原菌が駆逐され、天然痘やポリオ等が撲滅されたと喜びました。また、電話やラジオ・テレビ等の通信手段

佛 教 音 楽

や、飛行機等の交通手段の飛躍的發展により、国内はもとより国外との情報交換も短縮化されてきました。

しかし一方で「不幸せにしたもの」が増えたことを決して忘れてはなりません。環境破壊に直結する無謀な施策や、科学兵器・核兵器の開発がその一つです。「人間の利便さのために」とか、「世界平和のために」という大義名分の下で、各国は大量殺人兵器の開発を競い合って来ました。そのあげく、二度に及ぶ悲惨な世界大戦を勃発させ、大量の殺人行為をおこなってしまいました。しかし、いまだに続く「戦争抑止力のための核兵器の実験」等は、人類最大の愚行・蛮行ではないでしょうか。

つい最近でも、原子力技術への過信や盲信による東海村の事件が発生しましたね。瞬時に全世界に知れ渡ったこのニュースに、各国は敏感に反応していました。私の家にも、汚染を心配してくれたアイルランド人から、見舞いの電話がかかって来るほどでした。

結果的には、原子力エネルギー保全に過度の誤信を置きすぎたあげく、二人の方が亡くなられました。本意ではないのに、軽視したりちよつとした感覚麻痺が大事件の

誘因になってしまった実例ですね。今後私たちは、核エネルギー等の原子力研究が内包している「限界と功罪」を、はつきりと見極める必要がありますね。

つい数カ月前には、二〇〇〇年問題として全世界的危機感を抱かせられたのが「コンピュータの誤作動問題」でしたね。人間の考える技術は本当に完璧なのか、どの程度安全なものであるのか、どのレベルから不確かなものなのかを、我々は見極めなければなりません。私は機械に弱い方ですが、全面的に信頼はしていません。

電気が止まり関係機器が連鎖的にストップしても、最終的に頼れるのは人間の精神活動でありましょう。表面的に華麗な利便部分ではなくて、誠実な心、ハートでありソウルではないでしょうか。二〇世紀末のいま、私たちはもう一度今世紀に得たものと失ったものとしつかりと見直してみる必要があるのではないのでしょうか。そんなことを思うとき、いよいよ「佛教の役割とは何か」ということが、重要な問題となつてまいります。

二一世紀は大変な世紀だと悲観的に考えるのではなく、だからこそ若い皆さんには、二二世紀を明るくものにしていただきたいという願いがあるので、冒頭にこの話題を

佛 教 音 楽

申し上げた次第です。

二 佛教とは何か？ その確認 — 「基本的佛教用語」の理解—

「佛陀 (buddha)」とは、「目覚める、知る、悟る」という意味の動詞「budh」を語根とした言葉で、「目覚めた者、悟った者」、すなわち「真実に目覚めた人、真理を悟った人」という意味です。この佛陀は決して人間と別次元の形而上的な存在の「神」ではなく、同次元の人間です。キリスト教で言う God でも、ヒンズー教の神々や、神道の神様でもありません。あくまでも「目覚めた人」なのです。ですから私たち個々人の中にも目覚めさえすれば「佛陀になれる要素」があるのです。このことに気付かせ、悟らせてくれるのが「佛陀の教え、佛教」であります。

佛教の開祖ゴータマ・ブッダ Gotama Buddha については、皆さんの持つておられる光華女子学園の『聖典』歴史編「釈尊伝」に紹介されておりますので、省略いたします。原始佛典によりますと、ゴータマ・シッダールタ Gotama Siddhartha が六歳の頃、ある畑で耕作を見て居られたとき、掘り起こされたばかりの土の中から虫が出

てきた。とたんに飛んできた鳥が、その虫をついばんでしまった。シッダールタは、「なぜ生き物は殺し合うのか」と嘆き悲しんだと記述されております。

シッダールタのこの悲しみが、佛教の始まりであるとも言えましょう。その後、いろいろな事象に対し疑問を抱き、考え続けた結果として、二九歳で出家し、六年間の苦行の後、三五歳で佛陀になられた。その流れが佛教の流れですね。真実に目覚められた方の教えの流れが佛教です。

その教法を八〇〇年前に、浄土真宗の宗祖、親鸞聖人が受け継がれ、釈尊から自分までの流れを通して、歴史上の人物から七人の方を大切な恩師「七高僧」と決められました。

インドの方が二人、竜樹・天親。中国の方三人、五、六世紀の曇鸞と六、七世紀の道綽、そして七世紀の善導の三人。日本では二人のお方、一〇、一一世紀初めの源信、その弟子で浄土宗の開祖である源空（法然）の七人です。

親鸞が学ばれたこの方々の教法の流れが、浄土真宗と言われるのはご承知の通りです。しかし親鸞には「浄土真宗」という新しい宗派を創設する意志は無く、常に師法

佛 教 音 楽

然上人の弟子である態度を貫かれておられます。

自分が亡くなった後の処理として、自分の遺骸は鴨川に流し、鳥や魚の餌にしてほしいとおっしゃっておられるほどです。

その後、親鸞の生き方を大切に伝持した方々の必然的歩みが、一つの宗派の形「浄土真宗」として形成されてきた次第です。本来は、ゴータマ・ブツダや後の七高僧、現実的にはもっと多くの師匠方の教法を通して、「佛陀の教法をただ聞法して行きた」というのが親鸞の基本姿勢でした。

ですから当然のことながら、浄土真宗の本来の姿には、宗派同士の争いは無いはず。しかし残念ながら三〇余年前も、真宗大谷派の中で、保守派と改革派の軋轢が生じ、不幸な状況に立ちいたった事実がありました。

親鸞の願いには、そのような「わが宗派のみ尊し」的抗争姿勢は無く、「御同朋・御同行」という姿勢の確立にありました。「佛法の下では同じ体を分けた親子・兄弟のようなものである」ということですね。

私たちは、常にこの原点に立ち返る姿勢を持続したいものです。佛教というものが、

真宗というものが更に身近になってくるはずです。

ここで本題の「基本的佛敎用語の理解」に入りましょう。レジユメをご覧ください。

「縁起 : *prāṭya-samutpāda* (*prati-√i-tya + sam-ud-√pad*), *pañicca-samuppāda*)」

すべての事象は、種々な要素が集まって生じているもの。

「無常 : *anitya* (*a-nitya*), *anicca*」

すべての事象は、常なるもの (*nitya*) ではなく、変化するもの。

「無明(無知) : *avidyā* (*a-√vid-ya*), *avijjā*)」

「迷い・苦しみ」の根元・原因は、「真実(真理)」に暗いこと。

「真実(真理、諦) : *satya* (*sat* [*p.pr.√as*]-*ya*), *sacca*)」

真実であること、明かなこと。

お気付きの通り、日常的に頻繁に使用されている言葉ですね。しかしほとんどの佛敎語が誤用されている場合が多いものですから、敢えてそれぞれの原語であるサンスクリット語とパーリ語も書いておきました。

最後の「真実」のところに「諦」という言葉があります。「諦める」は一般的に

佛 教 音 楽

「ギブ・アップ、放棄する」と理解されていますが、佛教で使う「諦める」は、「明らかに究める」という意味です。「真実を究める」という意味です。決して「放棄」ではありません。「物事の本質を見究めること」であり、その姿勢を教えてくださいのが佛教の教えの本質であり大切なところです。

三 宗教の本質 — その本質的語義と慣例的語義 —

漢字「宗教」の語義は、「宗（本源、最善）、成就（完成）されたもの（Siddhantaの翻訳）」の「教え」という意味です。完成されたもの、完成された極致という意味で、この言葉は実は、「Lankāvatāra-sūtra 入楞伽經」というスリランカの国名を冠した經典の中で、「宗教」と漢訳されたのが最初で、佛教經典の言葉でした。

ところで明治の文明開化の時代、「Education」の翻訳に「教育」の言葉が当てられたように、「Religion」を翻訳する時に、身近にあった佛教語「宗教」を当てはめたのでした。

ヨーロッパ文明におけるキリスト教の果たす役割は、その精神的中心基盤であるだ

けに、非常に大きな影響力があります。その神学上の重要な語義解釈の一つが、「Religion」の解釈です。主に二通りの解釈があるようです。

一つは「re（再び）」という接頭辞と「leg（拾う、読む、集める、観察する）」という語根の合成語解釈であり、もう一つは「lig（結ぶ、縛る）」という語根との合成語解釈です。いずれにせよ、キリスト教の「神と人とを結び付ける」のが「Religion」の本義なのです。

神は人間ではなく、「絶対者」であり、他の「すべてのもの」は「絶対者 神の思し召し（意志）」で造られているといわれますね。その神の恩寵・恩恵により明らかに示されたものとの関係性が「Religion」と言われます。ここに「啓示の宗教」と言われる所以があります。

一方、絶対なる「神」による救済ではなく、万物の縁起性を自覚的に気付いて行くことから、「宗」を明らかにするのが「佛陀の教」で、「自覚の宗教」と言われる所以です。

再度厳密に規定しますと、佛教は「宗教」ではありませんが、「Religion」の一部で

佛 教 音 楽

はありません。

以上の通り、佛教の基本的用語と同様に「宗教・Religion」の関係も軽視できないことになりますね。「新しい言葉」に出会い、その本意を調べる時、可能な限り語根まで尋ねてみると、言葉の真意が深く頷かされてきます。辞書の第一義だけでなく、第二、第三義の意味の中にもっと大切な意味が含まれていることがあります。

いろんな言葉に触れ、ぜひ辞書を繙き、自分が理解したのはどの部分かを確認すればいいわけです。単純に第一義だけで理解すると、間違うこともあるようです。

四 人生と音楽 — 人間にとって音楽とは？ —

儀式もそうですが、人の意志は共通した何らかの形式で表現しないと、相手に真意が伝わりません。文字で伝える場合、とくに日本語では同音異義の問題もありますので、漢字まじりの表記がふさわしいですね。

一方音声で伝える場合、無意識のうちに語調に変化を与えて、自分の意志を伝えていくものです。音程や間などの音調や呼吸は、文字表現では十分に表現できません。

その内包する「響き」が最も大切なのです。

では、難聴者を含め聴覚を失われた方や、言語障害の方の場合はどうでしょうか。意志表現の場は閉ざされるのでしょうか。否ですね。この場合でも、その意志は伝わるのですね。「心からの意思表示・ひびき」があるからです。心からの強い意思表示があるからです。つまり「言葉としての表現の有無」だけが決定的な重要要素ではありません。昔から「以心伝心」とか、「目は口ほどにものを言う」とも言われます。

卑近な例ですが恋人同士が見つめ合ったりする時、言葉を交わさなくても理解し合える時もあるようです。伝えたいと願い合う精神的な気持ちをお互いに共有できるからでしょうね。

物理的に音響学的な音としては耳に入らないかも知れない。ヴォリウムとして針は動かないかもしれない。でもお互いの意志は通じ合える世界もあるのですね。

言葉が通じなくても、現実にはモーツァルトのある種の音楽を聴かせると、植物でも活き活きするそうです。胎教にもいいと聴きます。相手を活性化させる響きがあるのは確かなようです。

佛 教 音 楽

単にヴォリリューム一杯にしたサウンドやノイズで相手を圧倒するのが音楽ではなく、心からの響きを伝える、それが音楽の本質であると思います。

このように見直してみますと、日常生活の会話も音楽の一つの現れであり、人生にとって音楽が極めて大切なものであることに気づかされてきますね。

例えば、私がここで黙ってしまいますと、「どうしたの?」と思われる皆さんの気持ちがこの講堂の空間に満ちて、一時的に異様な雰囲気広がりが、耐えられなくなるでしょう。しかし空間の死活を左右しているのは、講堂という建造物ではなく、中に居る私たちです。この空間を絶え難い騒音の場にするのも、深い感動の場にするのも、第三者ではなくて、私たち自分自身なのですね。

これが、実は音楽の世界であり、佛教の世界であるとも言えるのでしよう。即ちチンガと言ってもいいと思います。人間は、その内側に静かな思いを持った時、ある程度冷静に判断できますが、怒りなどでカッとなりますと冷静な判断はできません。皆さんも経験がとおりでしょう。何かに行きづまった時、内省してみると、次のステツプが見えて来るようです。そういう流れやあり方を私たちが数多く経験し得た時、パ

ソコンとか自動車、携帯電話等のいろいろな機器に囲まれていても、それに埋没されずに済む生活が、はつきりと実感されて来るようです。

Ⅱ 佛教音楽とは？

一 佛教音楽

佛教は、眞実を悟った方の教えであり、音楽は、本当の響きであると申し上げました。声がきれいだとか、大きいとか、ヴォリュームで相手を威圧することではありません。人間は体調や性格によって、か細い声しか出せない場合もあります。しかしその弱い言葉の中にも、その人の願う本当の響きがあるのです。心にしみ込む響きがあるのです。そして互いに心の交流を楽しむ。「楽」という字には、「願う」という意味があり、親鸞も「願う」と読み替えて居られます。

つまり、「心の響きの世界」が「音楽」であり、「眞実が響きわたっている世界」である。心の喜びとなるような世界がつくられるように願うこと、そういう願いを持つ

佛 教 音 楽

心の働きが「音楽の本質」の一つです。「佛教音楽」とは、私にとっては、「多が一つとなれる響きの世界」であり、「心が一つとなれる響きの交流している世界」であると実感しております。

別の言葉で表現すれば、「佛教そのもの」であり、その「実践的表現の世界」であると思います。

1 釈尊と音楽

釈尊の布教活動は皆さんがお持ちの「聖典」の「歴史篇」に詳しく書いてあります。釈尊は二六〇〇年前の極めて特異な人間ではなく、いま現に、皆さんに慈愛の眼を注いでおられる方だということがわかります。このことを、ぜひ皆さん方に感じ取っていただきたいと思います。

ところで釈尊は音楽をどのように表現されておられたでしょうか、この事例を經典にたずねてみましょう。

2 經典記述事例

最初期の經典群は、釈尊が使われた言語に近い言葉と言われるパーリ語で編纂され

ていますが、その中の「Sakka-pañha-Suttanta（帝釈所門經）」を引用しました。

「パンチャシカが」この様に歌い終わったので、世尊はガンツダツバ「音楽神」の子であるパンチャシカに次のように言われた。

「パンチャシカよ、いま汝の「弾いたペールヴァ製の黄色いヴィーナの」絃の音色は、汝の歌声と調和し、歌声は絃の音色と調和していた。しかもパンチャシカよ、「汝の」その絃の音色は歌の音色に勝らず、歌声は絃の音色に勝ったものではなかった」。

パンチャシカの弾き歌いを釈尊がお聞きになって、「すばらしいハーモニー（ひびきの世界）だった」と。「パンチャシカの心のひびきが伝わって来た」ことを喜んでおられる記述です。

一般的に美声の持ち主はその美声にとらわれ、伴奏楽器を軽視する傾向におちいり易く、楽器が得意な人は楽器を強調したがるものですが、パンチャシカの音楽は、見事に調和した本質的なアンサンブルであった、とこの經典は記述しています。

佛 教 音 楽

3 結 集

釈尊が亡くなられた直後、五〇〇人のお弟子さんたちが、その教えを後世に残したいとの願を持って、經典の編纂會議（結集）を開催しました。主だった佛弟子が中心になって、「私はこのようにお聞きした」と披瀝し合い、互いに確認し合いました。

經典は、必ず最初に、「如是我聞（かくの如く我聞けり）」で始まります。佛典の編纂會議のことを「結集」(Saṅgīti)と言いますが、「sam-」は、「一緒に」とか「共に」と言う接頭辞で、「gīti」は、動詞「√gai（歌う）」を語根とする言葉です。『梵英辞典』では「singing together, concert, symphony」等とも翻訳されている言葉です。「交響曲 symphony」の「sym-」は「一緒に」と言う接頭辞、「phony」は「音」でしたね。

今の説明でおわकारの通り、佛典の編纂會議「結集」は、「共に歌い合う」という意味でした。原始佛教学を専攻し、この「Saṅgīti」を知った時は、大きな驚きであり、喜びでした。言葉の語源を尋ねてみて、その言葉の意味が深まったのです。特に「合唱音楽」に青春時代を費やしていた私にとっては、佛教学専攻への強力な基本姿

勢として大切な言葉になってくれました。現在でも「御同朋・御同行」と共に生きる基本になっております。「共に（一緒に）行動する」ことがアンサンブルの本質です。誰かに命令されて行動するのではない。「一緒に」というのは、相手の考え方や呼吸がわからないと充分ではありません。自覚に基づいた積極的協調性がその根底に求められるのです。

二 佛教音楽 — その流れ —

1 概説

佛教音楽の歴史的流れをレジユメに沿って概観してみましよう。

「Rg-veda（リグ・ヴェーダ）」の伝統の中で始まった釈尊在世当時の佛教音楽は、詳細な文献記録がありませんので明確なことは不明であります。しかし前項のように、現存の関係經典文献や、サンチーやアジャンター等の彫刻・絵画等に見られるように、楽器やその演奏等の記録を通してある程度は知ることができます。

インドからネパールやチベットを經由した「北伝佛教」に対して、紀元前三世紀頃、

佛 教 音 楽

マウリア王朝期のアショカ王時代にスリランカに伝わった佛教や、その後ビルマやタイに伝えられた佛教を「南伝佛教」といいますね。

南伝佛教は 長老派佛教とか上座部佛教 (Theravāda) とも言われますが、「Thera」は「長老、上座」のことで、「vāda」は「vād (説く、語る)」を語根とする言葉です。原語の内容は「上座・長老の方々が語り伝えられたもの」という意味です。

一般的に「大乘 マハーヤーナ (Mahāyāna 優れた乗り物)」に対して、「小乗 ヒーナ・ヤーナ (Hīnayāna 劣った乗り物)」と言われますが、「ヒーナ・ヤーナ」という呼称は、後世の大乘佛教徒からの「差別的蔑称」であることを知っておいて下さい。

さて、この上座部佛教で集大成された「パーリ語三蔵經」の中から、若干の関係部分をご紹介したのがレジュメの資料です。

まず初めにご存知と思いますが「三帰依文 [Tri-saraṇa]」をご覧下さい。

(1) 「三帰依文 [Tri-saraṇa]

Buddham saraṇam gacchāmi,

私は 佛に帰依いたします、

Dhammāṇi saraṇāṇi gacchāmi, 私は法に帰依いたします、

Saṅghaṇi saraṇāṇi gacchāmi. 私は僧に帰依いたします。

三節から成りますが、最初の単語「佛、法、僧」が違うだけで、後の二つは一緒ですね。「佛・法（佛陀の教え）・僧（僧伽）」を「三宝」とも言いますが、誤解し易いのが「僧」の言葉です。冒頭でも申しましたが、「僧」は、特定の「僧侶」のことでなく、「佛法を中心とする集合体、団体、仲間」という単語「僧伽」の省略形です。この三宝「佛・法・僧」を「saraṇa（拠り所、安らぐ場所）」として「gacchāmi（私は生活してまいります）」という意味で、佛教徒としての基本的意志表明の言葉です。

ここで注意願いたいのは「gacchāmi」の「-mi」です。これは「一人称単数現在形」の語尾ですから、「他人の問題」ではなく、「私自身の意志確認（自覚）」が大切なのです。先ほど触れた通り、「佛教は自覚の宗教」であることがこの言葉によって、更にはつきりしますね。このパリー語「三帰依文」のメロディーは、万国共通のようです。

佛 教 音 楽

(2) 【法句経 Dhammapada 5】

Na hi verena verāni sammant' idha kudācanam,

まことこの世では、怨みによつては怨みは決して消える（しずまる）ことはなく、
averena ca sammanti, esa dhammo sanantano.

怨みより離れてこそ消える、これが永遠の真実「教法・基本」である。

一九五一年九月、サンフランシスコで第二次世界大戦終結の対日講和会議が開催されました。その時、後のスリランカ大統領になられたJayewardeneさんが、この偈文を引用して「スリランカは、日本に対する賠償請求権を放棄する」と演説され、人々に深い感銘を与えました。同じ佛教国の立場から、当時の日本の国情も配慮して下さったのでしょうか。

この偈文は、佛教精神表明の典型的な一つですが、一般的には実践の難しさを伴う内容です。当時の戦勝国など世界各国の敗戦国日本に対する感情は、裁判の倫理を軽視して、むしろ無視して日本を断罪に処することでした。そのような世界の趨勢の中でのスリランカの賠償請求権放棄発言です。

現在でもスリランカの人々はこの事実を知っていますが、残念ながら肝心の日本人の方が忘れていくようです。あるいは皆さんは戦後の教育方針により、学ぶことがなかったかも知れませんね。

先ほど第二次世界大戦直後の戦勝国の対日感情に触れましたが、その事実が「東京裁判」といわれる「極東国際軍事裁判」にあらわれました。

数年前、アメリカの公文書公開条令により、公文書館に保管されていた「東京裁判記録」フィルムが公開され、日本でも紹介されました。私はNHKの放映でその事実を初めて知りました。

結論的に申し上げますと、「人類の歴史上、最も愚劣な犯罪行為を犯した日本国を断罪する」というのが東京裁判の目的であり、結論でした。しかし記録フィルムから知られたことは、「正規の裁判形式・倫理を逸脱した戦勝国側の一方的予断裁判」という事実でした。もちろん私は第二次大戦が正しかったと申し上げるつもりはありません。申し上げたいのは、付和雷同的な判断とか一方的な情報操作による判断は、極めて危険な結果に墮し易いものだとということです。私たちは、事実を事実として真摯

佛 教 音 楽

に謙虚に学ぶ必要があるのではないかということなのです。ぜひ皆さんも機会を見つけて、そのフィルムをご覧になることをお勧めいたします。

レジュメに戻りますが、時間の関係でアジア各地の状況を概略的にみてみましょう。東南アジアでは、カンボジアのアンコールワット Angkor Wat やジャワ島のボロブドゥール Borobudur 等に佛教文化の影響を色濃く受けた彫刻類が残されています。しかし一一世紀以降は、イスラム文化圏の波に翻弄され、佛教は衰退していきました。

一方、三世紀頃からはガンダーラを經由して中央アジア、トルキスタンに伝わった佛教は、皆さんもご承知の通りと思えますが、佛教美術の分野をも発展させています。ところで、すでに前漢時代の中国に伝来していた大乘佛教は、儒教・道教に並ぶ勢いで広まりました。南北朝時代から隋・唐の時代には、国家的規模の佛教儀礼も確立し、佛教文化が盛んになり、声明も最盛期を迎えております。地域的特性から西域楽の胡楽も流行し、同じく西域の軽業・手品・演芸等も「散楽」として流行していきまします。これにより、唐時代は世界一の音楽文化の発展した国とも言われました。

また、北伝佛教の流れの上で重要なチベットでは、地理的特徴の秘境性もあり、佛教は、七世紀中葉に国策として、特に密教佛教が流布されました。その特殊性ゆえに独特な音楽も伝承されています。特にボン教と佛教の混合であるラマ教では、音楽が重要な要素となっています。総じてチベットの佛教音楽は、通奏低音を特色とする声明で、独得の雰囲気を出す音楽です。

最後に、中国や朝鮮を経由して日本に伝来された佛教音楽の状況を見てみましょう。

2 声明 Śabda-vidyā

レジユメの「(1) 定義」に纏めたように、インドにおける学問体系の分類法として、「五明 (Pañca-vidyā-sthāna)」があります。五つの体系を明らかにするという意味です。

- (1) 声明 Śabda-vidyā：言語・文字音韻・文法に関する学問。
- (2) 因明 Hetu-vidyā：論理学、真理証明に関する学問。
- (3) 内明 Adhyātma-vidyā：自宗の教理・教義、特に佛教の真理に関する学問。

佛 教 音 楽

(4) 医方明 Cikitsā-vidyā：医術(医学・薬学等)に関する学問。

(5) 工巧明 Śilpa-karma-śhāna-vidyā：工芸・技術・芸能・曆数に関する学問。

第一番目の「声明(Sabda-vidyā)」が、まさしく佛教音楽です。一覽されてお判りの通り、すべての学問体系の最初・基本に置かれております。中国佛教・朝鮮佛教を經由した日本の佛教も、「声明」の単語をそのまま使用しております。

当初は、宮中を中心にした使用でしたが、後に一般社会にも広まり、その一部が猿樂や田楽に変化して行きました。田楽は、近代まで田植えの時の囃子音楽として使用され、男衆のお囃子にあわせながら、早乙女たちがリズムに乗って田植えをしたそうです。

次の「(2) 展開」ですが、佛教伝来最初期の佛教音楽「声明」は、「梵唄(インド音楽)」と言われておりました。一つの歴史的事実を紹介しましょう。

天平勝宝四(七五二)年四月九日、聖武天皇発願の東大寺大佛(毘盧遮那佛)開眼供養会が営まれています。その時佛教儀式に則った正式な資格者が日本にはいませんでした。そこで、既に第九回遣唐使の帰国と共に来日(七三六年)していたインド

のバラモン僧菩提僊那 Bodhisena を導師として、大佛開眼供養法要が営まれたのでした。

その後、平安時代には、佛教儀式の整備も行われ、実質的にも「梵唄」から「声明」へかわっていききました。

「声明」の現代的解釈として、広義・狭義の二面からの解釈もありますが今は省略します。

ところで、「声明」の伝承手段であるその記譜法はどの様なものだったでしょうか。それがレジユメに書きました「博士」^{はかせ}です。声明の楽譜のことで、古博士、五音博士、目安博士の三種がありますが、時間の関係でこれも省略しましょう。

現代では、一般的に「博士」とは「学者の学位」の意味に限定していますが、本来は「学問またはその道に広く通じた人、ものしり」のことを意味する言葉です。

次に「3 近・現代のあゆみ(動向)」をたどってみましょう。明治期における音楽教育の草創期は、童謡運動の開始時代でもありますが、佛教唱歌の果たした役割は多大なものがありました。

佛 教 音 楽

すなわち、近代化を迫られた佛教界は、キリスト教の日曜学校制度を取り入れ、子どもたちへの教化活動として、佛教童謡、唱歌の運動を進めていきました。この動きが日本の音楽教育に与えた影響は少なからぬものがありました。

この時期に国家の方針として、明治一二年、東京音楽学校の前身「文部省音楽取調掛」が設置され、近代的音楽教育が開始されます。

大正期は、大正デモクラシーの社会的気運とともに始まった「赤い鳥」や「金の船」運動に呼応した山田耕作・成田為三、中山晋平・本居長世や弘田龍太郎等の洋楽作曲家の活躍し始めた時代でした。

この時期に重なった佛教音楽も、いま申し上げた山田耕作・本居長世・弘田龍太郎等の協力もあり、その成長期を迎えています。宗門関係者としては澤康雄や野村成仁等の活動もあり、大正七（一九一八）年に「恩徳讃」が、大正一二（一九二三）年には、真宗各派連合の真宗協和会公募作品「真宗宗歌」が、浄土真宗立教開宗七〇〇年記念として発表されております。

昭和期に入りますと、昭和三（一九二八）年、文部省宗教局の中に佛教音楽協会が

創設されました。驚くべき決定ですが、その理事や評議員には、著明な文学者や作曲家、学界・財界の有力者達が就任しております。翌年の昭和四（一九二九）年四月三日、協会の企画による「佛教音楽協会 第一回創作発表会」が開催され、このような楽譜と共に発表されました。第一回目の内容は「花まつりの歌」と「朝の歌」であります。

第二回には一篇が同時に発表され、その後、昭和一五年八月の第一一回発表会まで続き、合計一七三曲が発表されております。世界恐慌や軍国主義台頭の時期に、文部省が主体となった佛教音楽の顕彰、発展、創作の事実を、私たちは再検討・再評価する必要があります。

第二次世界大戦敗戦による社会的大混乱期の昭和二二（一九四七）年三月、「大谷楽苑」が創設されました。「すべての面で混乱している世相を、音楽の力で癒したい」とのたいなる願いによって結成された混声合唱団です。その発願者は、当時の東本願寺御法主大谷光暢台下と、光華女子学園の総裁であられた大谷智子裏方の御両方でした。

佛 教 音 楽

時代に相応しい歌詩を公募し、しかるべき作曲家に委嘱して発表する形式が採られ、翌三三（一九四八）年六月五日に第一回発表会で十曲が発表され、一〇月一日には出版発行されています。作品には『みほとけは（仲野良一・信時潔）』、『みめぐみの（河合恒人・古関裕爾）』、『人の世の（八谷秋剣・服部正）』、『ほとけさまは（森山美苗・弘田龍太郎）』等があります。第二回目の一〇曲が昭和二八（一九五三）年六月一日に出版と続き、最終的には三四曲が一冊にまとめられ、大谷楽苑選定『讃仰歌』として昭和四八（一九七三）年四月一日にこのような体裁で出版されました。

この『讃仰歌』第一曲目が皆さんもご存知の『みほとけは』です。作曲家信時潔氏は山田耕作氏と共に日本歌曲界を育成された代表者のお一人です。敬虔なクリスチャンの方で、戦時中、鎮魂歌『海ゆかば』を作曲された方です。この曲は、戦時中の発表とその荘重さもあって広く歌われました。しかし終戦以降は、軍歌として厳しく排斥され、このため信時先生はその責任を一身に負われ、戦後、完全に筆を折っておられました。しかし、昭和三二年、この『みほとけは』を作曲されたのです。仲野良一作詩の内容に感動され、筆をとられたのでしょうか。

私的企画とはいえ、このような大谷楽苑の業績は、佛教音楽界にとっても大きな出来事として評価されるべきものです。

最近途絶えていた「佛教音楽演奏会」が、来たる六月一五日、アルティで開催されます。林達次先生の合唱団「京都ゲヴァント・ハウス」の、「大谷智子裏方、上村けい先生を偲んで」というサブタイトルによる演奏会で、「讃仰歌」や「交声曲 樹下燦々」等を中心として演奏します。私も客員メンバーとして参加いたしますが、興味のある方はお聴きになってみて下さい。

一方大谷楽苑と前後して、大谷派宗門関係者による「日本宗教音楽協会」も設立されますが、時間の関係で詳細は省略いたします。

また昭和二八（一九五三）年、在京の浄土真宗関係四大学が中心になって発足した「京都学生佛教音楽研究会」は、皆さんの先輩方も積極的に参加され、活動しあいました。

特に昭和三六（一九六一）年、親鸞聖人七百回御遠忌記念諸行事中、唯一の東西両本願寺共催が交声曲『歎異抄』の発表でした。勿論主役は「学佛音」が中心の合唱団

佛 教 音 楽

でした。

ところで「(2) 作品」の中にある『樹下燦々』は昭和二五(一九五〇)年の作品ですが、作詩・作曲の阿南知也、清水脩のお二人は兄弟で、真宗大谷派のお坊さんです。特に弟さんの清水脩先生は、日本の音楽界・作曲界・合唱界に大きな業績を残された方です。その他の事例は、後ほどレジュメでイメージを広げてみて下さい。

Ⅲ 佛教音楽 その目的 — 心に響き伝わるもの —

〔実例として演奏テープを用意したが、機械の都合で当日は、再生出来ず。演奏予定していた作品の歌詞を曲の紹介と合せて掲載する。〕

それでは、ここで実際に佛教音楽をテープ演奏でお聞きいただきたいと思えます。子どもの歌と普通の讃歌、つまり大人の歌の二つに分けてみました。はじめに子どもの歌を二曲ほど聞いていただきます。最初は「ほとけさま」という曲です。

ほとけさま 山田 静作詞

小松 耕輔作曲

一、のんの ののさま ほとけさま

わたしのすきな かあさまの

おむねのように やんわりと

だかれてみたい ほとけさま

二、のんの ののさま ほとけさま

わたしのすきな とうさまの

おててのように しつかりと

すがってみたい ほとけさま

三、のんの ののさま ほとけさま

みあかしあげて おがむとき

おすがたみえて きらきらと

ごこうのひかる ほとけさま

佛 教 音 楽

次は、「ほとけさまは」という家庭の中の状況を歌いあげた作品です。

ほとけさまは 森山 美苗 作詞 弘田 龍太郎 作曲(大谷楽苑選定)

一、ほとけさまは どこにいらっしやる

春は 花咲く 枝のもと ララ

夏は 水辺の 草のかげ ララ

秋は 空ゆく 雲の上 ララ

冬は 窓うつ 雪の中 ララララ

いつも どこかで みていてくださる

いつも 何かを おしえてくださる

ほとけさまは

あれあれ あそこに いらっしやる

二、ほとけさまは どこに どこに いらっしやる

お眉^{まゆ} ま白^{しろ}な おじいさま ララ

お目^め々 やさしい おばあさま ララ

お胸^{むね} 豊^{ゆた}かな お父^{ちち}さま ララ

お手^て々 清^{きよ}らな お母^{かあ}さま ララララ

昼^{ひる}でも 夜^{よる}でも 守^{まも}ってくださいる

いつも あなたを 支^{ささ}えてくださいる

ほとけさまは

あなたの おそばにいらっしやる

非常に日本的な家庭の雰囲気^{ふんいき}が知られるような歌詞^{かじ}になっています。作曲者^{さくしやくしや}の弘田^{ひろた}龍太郎^{りゅうたろう}さん「雨^{あめ}」、「靴^{くつ}がなる」、「春^{はる}よこい」等の童謡^{どうやう}をたくさん作曲^{さくしやく}されています。

次に、一般^{いぱん}の作品^{さくひん}をご紹介します。一曲^{いつきょく}目は、皆さんの「聖典^{せいてん}」にも載^のっています。「みほとけは」です。

佛 教 音 楽

みほとけは 仲野 良一 作詞

信時 潔 作曲(大谷楽苑選定)

一、みほとけは

まなこをとじて み名よべば

さやかにいます わがまえに

さやかにいます わがまえに

二、みほとけは

ひとりなげきて み名よべば

えみてぞいます わがむねに

えみてぞいます わがむねに

三、みほとけは

したいまつりて み名よべば

つつみています わがいのち

つつみています わがいのち

二曲目は、「みめぐみの」という作品です。古関裕而さんの作です。この方は、「鐘の鳴る丘」とか、「君の名は」という終戦直後に有名になったラジオ・ドラマの主題歌などをお書きになっていらっしやいます。

みめぐみの 河合 恒人 作詞

古関 裕而 作曲(大谷楽苑選定)

一、みめぐみの ひかりにぬれて

蓮池に 花はま白く

みほとけの 生命かおりて 現し世に

美しき 美しき 花はひらきぬ

二、まろき虹 空にかかれる

七色の橋を わたりて

みほとけの み手にいだかれ 遥かなる

美しき 美しき 国をめぐらん

佛 教 音 楽

三、わがこころ うれいなき華

永久とこねの母ははを したいて

みほとけの み名なとなえつつ 諸共もろともに

美うつくしき 美うつくしき 道みちをあゆまん

三曲目は、「いのち」という佛教の生命観が巧みに歌いあげられた作品です。

いのち 藪田 義雄 作詞 下總 皖一 作曲

一、野の花の 小さないのちにも

仏はやどる 仏はやどる

朝影あさかげと ともに来て

つつましい 営みを与える

おなじように

二、野の鳥の 幼おきないのちにも

仏はやどる 仏はやどる

涼風すずかぜと ともに来て

生きる身の 喜びをささやく

おなじように

三、白露しろつゆの 儂はかないのちにも

仏はやどる 仏はやどる

月魂つきしほと ともに来て

一夜さの やすらぎを教える

おなじように

佛 教 音 楽

Ⅳ む す び 佛教音楽その目的—心にひびき伝わるもの（真実の生命との出遇い）—

人がそれぞれに感動し合えるためには、「心にひびくもの」が必要です。特に艱難辛苦を経験した人の言葉には、重みや深みを含めて、心豊かなひびきが内在しています。何人かの言葉を書き出してみました。冒頭はベートーヴェンの言葉です。

「Von Herzen—möge es wieder—zu Herzen gehen.」

（心から　そして再び　心へと伝わらんことを。）

彼は晩年、完全に耳が聞こえなくなつてから代表的名作の一つ『莊嚴ミサ曲』を書きました。その「キリエ」の冒頭になぐり書きしてある言葉です。

彼にとつては、神から伝えられた「心のひびき」によって、この作品が書かれている。演奏者はその真意を感じて欲しい、そしてその演奏を通して神のひびきを聴衆の心にも伝えて欲しい。彼のこのような強い願いが、「神の心を伝える仲介者」としての切実な使命感となつて、この「走り書き」が残されたのでしよう。

彼には「自分が作曲した」というより、「神から書かしめられた作品」という思いがあったのではないだろうか。作曲の動機を与えていただき、それが作品になった。

一般的に、「作品の良し悪し」は、「演奏者の姿勢・こころ次第」であるとも言われます。後世に残る作品には、必ずこのような「作品独特のいのち」があります。

六番目の『自分の番——いのちのバトン——』の詩は、家族としての長いのちの流れや歴史の大切さを教えてくれますね。また『美^はしき色あれど香のなき花のごといのち無き言の葉いとさみしかり』からは、「偽りの無い言葉の大切さ」が人間関係の原点であることを知らされます。

ある方の文章を引用します。

若い頃、私は目の前にある「今」しか見ようとはしなかった。然し「今」の後ろには長い過去があり、「今」の先（前）には、計り知れない未来があることを、永遠の時間の中で感じとろうとするようになった。

時間はまさしく一瞬間の連続です。瞬間は、一面的には断片的ですが、計り知れない連続を含んでいるということですね。また次のように書いています。

佛 教 音 楽

それと共に人間は想像もできない埋蔵量を秘めていることを知るようになった。自分が知っている自分は部分に過ぎず、自分の知らない自分の方がはるかに深い。「生きてゆく」ということは、埋蔵されている自分を絶えず耕しながら、慈しんで育てていくことではないだろうか。「生きて行くということ」、つまり人間としての営みは、「埋蔵されている自分を絶えず耕すこと」であり「慈しんで育てていくこと」ではないだろうか。

この方は、がんで亡くなられました。

ところで初めの方でも触れましたが、私たちの周辺は、「環境破壊」や「過剰情報」等で混乱しかねない現状です。これは、精神文化よりも物質文明を優先させて来た二〇世紀の当然な結果なのでしょう。特に日本におけるこの半世紀は、「温故」で代表される「伝統文化」を軽視して来た自業自得の結果でもありません。

それだけにここで取り上げたような「先人たちの心の記録」に出遇いますと、「自分の未熟さ」を痛感させられます。過去の伝統の中で育てられて来た「自分」であるにも拘らず、その事実を忘れて、目先の打算性に振り廻され、「自分独りの力で生き

て来た」かの如き自己錯覚。この自己誤認の恥じらいや事実気づきますと、自ずから「誠実な言動による出遇い」を求めるようになるはずです。

皆さんもぜひ「今まで知って来た自分よりも更に深い自分」を捜し求めて下さい。その自分は、「佛性に支えられた自分」であるはずです。

「この世は私の花を咲かせに来た処、この世はあなたの花を咲かせに来た処」とも言われます。お互いに「美色の花」にとどまらず、「香のある花」を咲かせ合ひましょう。

音楽の立場から見れば、「本当のひびき（ハーモニー）は演奏者・聴衆すべての人々の心に共通に伝わるひびきの世界」であることが実感されるはずです。この事実気づかせられたとき、静かにもゆつたりと湧きあがり広がって来る感動のうねりがあり、それは「諸師友に支えられ、包まれ、生かされていた現実」の実感であります。

また「現実の自分」は、「全世界に一人しかいない自分」であると同時に、その背景には、《悠久な生命の流れから「私」に注がれている願い》に「生かされていた自分」があるのですね。

佛 教 音 楽

結論を申し上げますと、「心にしみ伝わるひびき」即ち「佛教音楽」への歩みが、「本当のもの（眞実の生命）」と出遇える方法の一つであると、私は実感しております。

宗教講座の第一回目は、「佛教音楽について」ということで数年来その機会を与えられております。申し上げる主旨は定まっておりますので、何時も同じことを繰り返していることでしょう。しかし私たちを取り巻く環境や状況は変わっていきますので、いよいよ今回も、新たな願いを持って若い皆さんにお伝えしなければいけないという思いにかられて、お話をさせていただいた次第です。長時間ご清聴下さり、有り難うございました。

——二〇〇〇年五月二四日——